

089タロー

表紙イラスト/まこりい



退魔師アイドル
瑠璃亜
渚の陵辱撮影会

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『退魔師アイドル瑠璃亜 渚の陵辱撮影会』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



退魔師アイドル
瑠璃亞
渚の陵辱撮影会

089タロー
表紙イラスト/すてりい

登場人物紹介

Characters

いずみ りあ

泉 瑠璃亜

巨乳巨尻でありながらウェストはくっきりとくびれたエロボディの新人グラビアアイドルとして人気の少女。その正体は、人間界で暗躍する闇の者を討滅する退魔師の巫女。

かげり

陰

南国育ちを思わせる快活な新人グラビアアイドル。ミドルティーンの割りには発展途上の身体付きで、どこか小動物を思わせる可愛らしい少女。瑠璃亜に憧れている。

「そう、そうだよ瑠璃亜ちゃん、その表情いいよ〜!」

南国風味を演出した、とあるホテルの中庭。ヤシの木のあるプールサイドで、カメラマンがしきりにフラッシュを焚いていく。

デッキチエアに寝そべる少女は、その要求に応えるべく蕩けるような笑顔を見せた。

「う〜んいいよその笑顔! そうそう、胸をぐつと押し出す感じで!」

鮮やかなピンクのビキニに包まれた真珠のような白い肌。風にそよぐ腰まで伸びた亜麻色の髪。それらをさりげなくアピールしながら、少女は少し唇を突き出してキスをしたような表情を作る。

その丸く形よい黒の瞳は、どこかあどけない彼女の顔立ちにとてもよくマッチしていた。鼻は小さめで愛らしさがあり、唇の形は桜の花弁を思わせる。薄く染まった目元には、自分のポーズに恥じらいを覚える初々しさすら窺えた。

もともとそのボディラインは、そんな顔立ちのあどけなさとはアンバランスなほど魅惑的なものだった。

何といってもまず目立つのは、量感タップリの二つの乳房である。93センチのGカップ。ダイナミックに突き出たそれらは、手に余るほどのサイズながら張りがあって垂れもない。シミの一つすら浮いておらず、眩しい白さと揺れる柔らかさが巨乳好きのファンのハートを確実に掴み取っていた。

続いてヒップ。こちらも89センチと大きく、やはり垂れずにきゅつと上を向いている。水着の食い込むその形は、まさに桃尻、見事なハート型になっていた。

その上で、巨乳アイドルに見かけられる太った印象はまるでない。巨乳巨尻の体型でありながらくびれや手足はしなやかで細く、贅肉のない美しいスタイルを誇っていた。

彼女の名は「泉瑠璃亜」。新人グラビアアイドルで、そのGカップバストと愛らしい笑顔が人気を博している美少女だった。

そんな彼女は今、初の写真集に向けてこうして撮影を行っている。ちよつぱり色気に無自覚そうな妹系のその表情が、ファンはおろかスタッフにも大好評だった。

「いいよいいよ、ラスト一枚。とびっきりの笑顔ちょうだい！」

カメラマンの要望に応じて彼女は今日一番の笑顔を見せた。

みんな、わたしを見てくれてありがとう！——そう言いたげな視線を送り、乳房と腰に腕を回してあえてそこを強調する。眩しいほどの笑顔は、まるで穢れを知らぬ天使が舞い降りたかのようなだった。

「うんいいよ、その顔！ はいっ、オッケーでえす！」

満足のいく一枚が撮れたのだろう。カメラマンは満面の笑みをこぼして頷いた。

次いで若い男性マネージャーがコートを肩に羽織らせてくる。今日の撮影が終了した合図だった。

瑠璃亜は豊満な胸に手をやり、ほっと安堵のため息をつく。その仕草には新人らしい緊張感が見え隠れしていた。

次いで彼女は際どい水着の胸元を弾ませ、心の底から感謝するような人好きしそうな笑顔を浮かべた。

「皆さんありがとうございました。ほんと、今日もすっごく気分よくできました！」

「いやあ、僕らも楽しかったよ。カメラマンさんなんて熱くなってきた」

「ほんとですか？ よかったあ、写真集なんて初めてだから失敗したらどうしようって」

着替えを終えた瑠璃亜は、帰り支度をしているスタッフとニコニコしながら話していた。

「大丈夫。瑠璃亜ちゃんは性格もいいしファンも多いからぜったい売れるって」

「や……やだあ、もっつ！ わたし、別に性格よくなんか……」

「そんなことないって。撮影中に照れるとこなんて見ていてどきってしちゃうくらいさ」

「むっつ！ それって不慣れってことじゃないですか」

「違う違う、変に慣れてないから可愛らしいってこと」

「そう……なんですか？ あはは、そう言ってもらえると、すごく……嬉しいです……」

両手を胸にやり俯く瑠璃亜。その伏し目がちになり揺れる眼差しは、色気を売りにするグラドルとは思えないほど可憐で初々しかった。

実はこうした一面こそが、男性ファンを惹きつける要因の一つだった。一部では演技だ

と囁かれるが、どこか本気くさい恥じらいの仕草がエロいボディとのミスマッチでいいのだそうだ。

おまけに彼女には、自分が魅力的であるということに無自覚な言動が多々あった。サインを求められ仰天したり、ファンだと言われると本気で照れて一人ひとりにお礼を述べたり。一度など、ファンが見ていた際どい水着の写真を奪って「恥ずかしすぎるから見ないでください」と真つ赤になってしゃがみ込んでしまったこともあった。

「グラドルとして大丈夫なのか？」という声もあつたが、うそに見えない初々しさと一生懸命な仕事っぷりが、スタッフにしてもファンにしても好ましく思えてしまうのだという。そして今も、もじもじと指を絡めながら上目使いでスタッフを見る。

「あの、わたしまだ新人ですから、こういったことまだ慣れてないんです。がんばりますから、これからもいっっぱい応援してくださいね！」

「もちろん。じゃあ次もよろしく。最高の写真集にするから、期待しててね」

「はいっ！ それじゃ皆さん、お疲れ様でした。お先に失礼します！」

元氣良く挨拶すると、瑠璃亜は軽やかな足取りでマネージャーと現場を後にする。すると途中で、同じくグラビアアイドルをやっている二人の少女と鉢合わせした。

「あ、お疲れ様です。今日はそちらも上がりですか？ わたしこれから帰るとこなんですけど、よかつたらご一緒しませんか？」

瑠璃亜は気さくに声をかけた。彼女らもまだ新人の部類で、瑠璃亜とはいくらか面識があった。

「……瑠璃亜ちゃん。うん、ありがと。でもごめんね、これから、ちよつと……」

「そ、そうなの、ごめんね。また今度誘つて、ね……？」

「分かりました。じゃあまた今度。それじゃ、お先に〜」

少し残念そうにしたが、瑠璃亜は明るく手を振つてホテルのロビーを出て行つた。それを見送つた少女二人は、ぎこちない笑顔を曇らせる。

「……いこ、美香。あたしたち、もうこうするしか……」

「分かつてる。分かつてるけど……！」

自分を抱いて少女らは悲痛な表情を浮かべる。

その背後に、先ほどとは打つて変わった陰湿な笑みを浮かべた男たちが歩み寄つていた。

「ふふ。さあて、本日の仕事も終わったことだし、そろそろ来てもらうとうしよるか」

男らが肩に手を伸ばすと、少女らはびくつと身体を震わせる。明らかに怯えの色があつた。

「……はい……分かりました」

それでも二人は俯いて唇を噛み、懸命に自分を押し殺していた。

そして——二人が男らとエレベーターに乗り込むのを、ロビーの外からこつそり覗く目

があつた。

「——やっぱり。気のいいスタッフのふりをして、あいつらが餌集め係というわけね」
亜麻色の髪を手で押さえながらその者は眼差しをしゅつとすがめる。その目つきは鋭く、どこか凜とした光を湛えていた。

「石又。場所は間違いないのね？」

「は、はい。支部からの話だと、まず間違いなく……」

「もう、すっかりしてよ。間違いでしたじゃ済まないんだから」
豊かな胸に知らず手を置き、その者は口元を引き結んだ。

——その夜。

都心に紛れたとある高級ホテルの一室では、淫らな肉声が響いていた。

「あはあん、ほおん、ああ刈忌さまあ、もつと、もつと強くうん！」

夜の街が一望できる巨大な窓のすぐ傍のソファ、その上では初老の男と歳若い女が裸で絡み合っている。

「ククク、随分とこなれたマン肉をしておる。大股を開いて喘ぎおつて。噂どおりの淫売めが！」

「ご、ごめんなさい、わたし、売れたかつたんです。売りたいから、あの男とも寝てえ……」

…!!」

「それが裏目に出たわけか。まったく、芸能界とは闇濃きものだな。人としてのモラルなど容易く捨てるものばかりだ」

その男、刈忌は芸能界の陰の権力者だった。表に出ることはまずないが、その一言で番組の一つ二つなどどうにでもできる力を持っている。

一方女は、大きなスキャンダルを抱えたアイドルだった。名を売るために不貞を繰り返した結果、騒動となり芸能界から干されそうになっている。

そして女は、今まさに、これを打開すべく枕営業に踏み切っている最中だった。

「ほおん、あひい、お、お願いです、刈忌さまのお力で、わたしにチャンスをお……!!」

「なんと貪欲で浅ましいのだ。感じるぞ心の闇を。クク、マン肉同様、実に淫らで甘美な闇よ」

グジュグジュと膣肉をかき乱しながら刈忌は奇妙なことを言う。喜びに歪んだ顔には、セックスとは別の快楽があるように見えた。

そう。彼の目的がセックスだけではないことは、彼自身とごく一部の者しか知らない……と——二度ほど女が絶頂に至りソファに沈んだ頃。

「刈忌様。例のグラドルたちを連れてきました」

ノックと共に部屋の戸が開き、酷薄そうな黒服の男らが二人の少女を引き連れてきた。

その男たちは、ホテルで瑠璃亜の撮影に加わった数名のスタッフたちだった。片や少女らは、瑠璃亜と話していたあのグラビアアイドルである。

「こ、今夜は、お、お招き、いただき……」

「あたしたち、その、だ、大事なお話が、あつて……」

「ククク、つまらん前置きなどよい。さあこちらへ来るのだ」

事前に話は通してあつたのだろう。刈忌は男根を隠しもせず、手招きした。

「お前たちはグラドルなのだろう？　なら、ご自慢のボディを見せてもらうか。おっと、慌てるな。ゆつくりだ、男を興奮させるように脱ぐのだ」

「は……はい……」

緊張と羞恥に震えながら少女らは服に手を伸ばす。

これこそが、瑠璃亜の誘いを断つた理由だった。

瑠璃亜と違い、二人は今ひとつ人気が出なかった。運のなさやマネジメントの問題もあるが、ともかく認知度は低かった。

しかも彼女らの事務所は多額の負債を抱えている。立て直しのため、何より人気を得るため、二人は貞操を売る覚悟を決めたのだ。

「震えておるぞ。よもや処女か？」

「っ……はい……」

「これはよい。近頃の娘は皆ふしだらで早々と膜を捨ておる。久方ぶりに膜つきを味わうとしようか」

涙を浮かべる少女らを見て男は愉快そうに腹を揺すつた。

彼女らの情報はすでに届いている。どんな経緯があつたのか、どれほどの葛藤があつたのか、そのすべてが、である。だが、だからこそ男は愉悦を覚える。

なぜなら——真に美味しいのは穢れゆくその心なのだから。

「ほほう、さすがグラドル、なかなかいい身体をしておる。どれ、下着はわしが脱がせてやろう」

哀れなほど怯える少女たちに男の魔手が伸びていく。そう、一度この道に踏み入つてしまえば余程の権威を手にしない限り逃れられない。男に抱かれたその瞬間から、彼女らは芸能界の怖ろしい闇と背中合わせで生きていくしかなくなるのだ。

疎む少女の細い肩から、紐が下ろされブラが剥ぎ取られようとした、そのときである。

「刈忌様、怪しい女を捕らえました」

またもドアがノックされて、黒服の男が誰かを連れて入つてきた。

「なんじゃ、これからというときに。今日はもう予定はないはずじゃ、下がつておれ」

「は、この女がうろついていたもので」

男が乱暴に突き出したのは、サラリーマン風のコートを着込んだ亜麻色の髪的美少女だ

った。

くりっと丸い綺麗な瞳。白い頬が柔らかそうな、あどけなさの残る顔立ち。細身でありながらぐっと胸元を押し上げる乳房。

グラビアアイドル、泉瑠璃亜の姿がそこにはあった。

「瑠璃亜ちゃん、な、なんでここに!？」

「あ、あの、わたし、皆さんがここにいて聞いて、その……なんだか危ないような気がして……」

怯えた表情で瑠璃亜はグラドル仲間を見やった。縮こまる姿は、まるで迷い込んだ子猫のようだった。

「ほう。情報が漏れたということか？ これは詳しく聞かなければいけないねえ」

刈忌は興味深そうに瑠璃亜のもとに歩み寄った。

「君は大層売れている新人だったね。名前は確か、泉瑠璃亜だったかな。なるほど美しい。愛らしい子リスのような顔をしておる」

舐めるように全身を見ると、男は目の前の巨乳を指先でなぞった。

「あ……い、いや、触らないで、ください……」

「身体つきも素晴らしい。これだけの乳でこのくびれとは。……どうかね？ わしの協力を受け入れてみる気はないかね。そうすれば君は、今よりもっと輝けると思うのだが」

自信たっぷりな男は囁く。その老いてなお鋭い眼差しが、どこか見るものを安堵させる怪しげな光を放っていた。

「つまり、エッチなコトをすれば、あなたの力でいっぱいファンに喜んでもらえるんですか？」

「ファンのため、か。なるほど、可愛いことを言う……もちろんだとも。わしに身を捧げ快楽に溺れれば、より多くのファンを魅了する華やかな世界を約束しよう」

飲み込みの早さに男は満足し頷いた。震える華奢な肩に手を置きそつとコートを脱がそうとする。

その手をやんわりと押し返しながら、瑠璃亜は顔を伏せ、前髪で目元を隠した。小さな唇が囁くような声を出す。

「そうすれば……美香さんに、あの人たちに手を出さないでもらえますか？」

「うん？ それは無理な相談だな。あの子たちは自ら媚を売りにきたのだから」

「——そう。ま、あなたたちなら当然の反応よね」

「——なに？」

少女の声音が唐突に変わった。どこか冷徹で毅然とした響き。思わぬ反応に男は動きを止める。

前髪に隠れていた目が、すっと上がって男を見据える。瞳がキラリと光を放ってしゅつ

と鋭くすがめられた。

「あなたたちに売る身体なんて生憎と持ち合わせていないの。あげられるのは、速やかな浄化だけよ！」

少女は吼え、全身のバネを使って大きく飛び上がった。

大の男を飛び越えるほどの脅威の跳躍力を見せると、その身体が宙で回転しコートがパツと剥がれて舞い上がる。

距離を取って難なく着地する少女。さつと振り返るその身体には、純白に輝く白衣と炎のように鮮やかな緋袴が。

スタイルのよいグラドル美少女は、一瞬にして刀を携えた巫女装束となっていた。

「貴様は——まさか、退魔巫女!？」

「ご名答。でももう遅いわ。芸能界に巣食う闇は今わたしが祓ってみせる！」

瑠璃亜は腰から唾なしの刀を抜き放った。鋭利な刃を肩口に構え瞬く間に刈忌に切りかかる。

一瞬の出来事に皆呆然。少女たちは当然のこと、護衛の男たちですら事態についてこれなかった。

ただ一人、醜い裸体を晒している男を除いて。

「不浄なる闇の者、覚悟っ！」

袈裟懸けに走る銀光を、刈忌は交差させた両腕で受け止めた。

その手首から肘にかけて、巨大なヒレのような黒い羽根が伸びている。

「ふん。よもやグラドルに扮して嗅ぎ回っておったとはな。退魔巫女も色を売る時代になったか」

「黙りなさい。すべては闇を祓うため。人の暗部に巢食い、闇を育て闇を食らう、そんなあなたたちを討ち滅ぼすためよ！」

刃を引き再度打ち込みながら瑠璃亜は毅然と言い放った。愛らしかったその眼差しには、今は打って変わって凜とした炎が宿っている。

「ほう、見事な太刀筋だ。もはや人と偽ってもおれんか」

閃く斬光は軽やかで鋭くまるで一陣の竜巻のよう。だが刈忌は腕の羽根を忙しなく振って閃きをことごとく受け流した。

「ならば久方ぶりに本来の姿に戻るとするかの。後悔するぞ小娘」

一度後退し距離を取ると、刈忌は裸の身体を広げてゾツとするような笑みを浮かべた。

瑠璃亜以外の皆が啞然とする中、その肌がどす黒く変色していき、全身が内出血したような不気味な姿となっていた。

その姿は、映画などのゾンビを髣髴とさせる。両腕に鎌のような羽根を持つ悪魔じみたゾンビのようだ。

さらにその目が血の色に輝き、身体全体から黒い靄が広がっていく。

「ひいっ！ な、なにこれっ？」

「やだ、苦しいっ……息が……頭ん中、おかしく……」

「みんなだめ、心を落ち着けるの！ これは奴が食らってきた人間の心の闇。平静でいれば効かないわ！」

瑠璃亜が叫ぶも、他の人たちは喉を押さえて激しい嘔吐感に見舞われていた。

刈忌が放つ闇の瘴気が彼らの心に忍び込んで、秘めたおぞましい欲求を表面化させようとしているのだ。

「ほう。これだけの闇を吸ってなお平静を保てるか。巫女といえど人には違いないだらうに」

凜とした表情を崩さない巫女に男は感嘆の色を見せた。

そう、これが刈忌の正体だった。それはすでに人ではなく、かつて死んだ人間の魂が闇を食らって具現化した闇の眷属。人の心の闇を糧としより濃い闇を拡散させる、一種の怨霊の類だった。

そして、それを長年討ち祓ってきたのが瑠璃亜のような退魔巫女なのだ。

「くっ、こんなに大量の瘴気を……いったいどれだけの人の闇を食らってきたというの」「ククク、芸能界とは闇深き場所だな。売りたい。注目されたい。儲けたい。上に立ちた

い。そんな欲望が際限なく集まり権力を持てば勝手に闇が擦り寄ってくる。女を味わうことまでできて実に楽な食事場だったぞ」

「ふざけないで！ 人の弱みにつけこんで枕営業を強いておきながら……みんなを傷つけ心に闇を負わせた罪、今日こそ償ってもらわう！」

瑠璃亜は白衣の懷に手を入れ豊満な胸元を探った。

二つの乳塊がぶるんつ、と揺れて中から複数の護札が取り出される。

「邪悪なる怨霊、闇の眷属、滅せよ！ 封魔蒼獄陣！」

少女が念を込めると、護札はぱつと燃え上がって青白い炎を纏う。指の又に挟んだそれを少女は鋭く投げ放った。

刘忌はふん、と鼻を鳴らし両腕の羽根ですべて打ち払う。護札は床に散らばって、幻想的な蒼白い光源となった。

「それで終わりか退魔師？ いや、男に媚を売る新人グラドルか？」

「その余裕が命取りよ。足元を見なさい」

「なに？ むっ、これは——」

刘忌は気付いた。足元に落ちた護札は、ちょうど六芒星を描いた頂点にある。炎が糸のように伸びてその形を描き出していた。

「ちっ、魔よけの術か！ させんわ！」

なおも巨乳をやわやわと捏ねられ乙女の理性がゆるゆると緩む。細い眉が悩ましげに歪み、小振りな唇は奥にねっとり唾液の糸を引く。

正直——気持ちよかった。羞恥と混乱が入り混じって驚くほど強い快楽が来る。女性の肉悦は心から入るのだ、混濁した意識は肉体を蕩かすいい温床となっていた。
だが——。

「うゝん素晴らしい絵だ、実に卑猥！ 今回のタイトルは『誰とでもヤリたがる泉瑠璃亜』で決まりですなあ陰様」

「くっ……あ、あなたたち、いい加減にいつ！」

レンズを寄せてきたカメラマンを、瑠璃亜は渾身の力で蹴り飛ばした。

「はあ、はあ……あなたたち正気なの？」

バナナボートから飛び降りると、よろめく足腰を叱咤し自分の荷物に手をかけ睨む。

「……こんなの立派な犯罪よ。どういふつもりだか知らないけれど、このことはしっかり報告させてもらうからね！」

これ以上は我慢ならなかった。芸能界では隠れたセクハラも横行気味だが、これはそんなレベルではない、輪姦と呼んでも過言ではなかった。

立場の弱いグラドルであれば涙を呑んで耐えることもあるのだろう。が、瑠璃亜の事務所には巫女協会がバックにある。度が過ぎた行為には相応の対処が可能だった。

だが、敵意を出した瑠璃亜の表情は、彼らの変貌を見て激しい動揺に変わっていった。

「……瑠璃亜ちゃん、被写体がカメラマン蹴るなんて反則だよ。グラドルはエロい格好見せるのが仕事なんだからさあ」

「え……あ、あなたたちっ……!!」

「大人しく喘いでくれないと、最高にヌケる絵が撮れないじゃないかあ」

スタツフたちの肌の色が薄黒く変色していった。目は血の色になり不気味さに輪をかける。

人間らしからぬその姿を瑠璃亜はよく知っている。成仏しきれない死者の魂に穢れが集まって形を得た、退魔巫女の宿敵、闇の眷属のものだった。

「どうということ？ まさか、わたしの正体を嗅ぎ付けて……!!」

信じられないという表情で瑠璃亜は宿敵たちを見やった。こういう事態にならないようにと目撃者は全員、記憶を封じさせてもらってきたのに。

（巫女協会も定期的に調査している。大体、派手に立ち回ったのは刈忌の一件だけ。簡単に知れ渡るはずがない。だったら——）

あとは——考えたくないが内通者だろうか。そこまで考えたとき、これまでとは打って変わったつやのある笑声が響き渡った。

「アッハハハハ！ まアだ気付かないのお姉さま？ よっほどバレない自信があったの

ね？」

「か、陰ちゃん、なっ——あなたまで!？」

見れば新人グラドルまでもが、闇の眷属らしい姿に変容していた。

健康的な小麦色の肌はくすんだ灰色に変色し、その爪は鋭く、瞳は真紅に変わっている。その面立ちと金色のツインテールが愛らしさを残してはいるが、舌なめずりする赤い唇が妖艶さを醸し出していた。

「そういうことだったのね。みんなでわたしを罠にはめて……」

「そゆこと。なんにも知らなかったのは、お姉さまただ一人ですよ」

瑠璃亜は齒噛みした。これは潜入任務なのだ、素性が知ればこういったケースは当然ありえる。分かってはいたが、一年間の芸能生活が心に隙を作ったのかもしれない。ともあれ今は、この状況を打破して本部に報告しなければ。そう考えて、手にしたバッグから退魔のための得物を取り出す。

と、愛刀の柄を握った瞬間、馴染んだ感触とのわずかな差異に瑠璃亜はハツとした。

「これは——違う！ 霊刀じゃない！」

「だアから言ったじゃない。知らなかったのはお姉さま『だけ』だって」

「どういうこと!? わたしだけって——はっ? まさか！」

ようやく合点がいった。ここに来たのは今いる全員と、あと一人、どこかに消えたマネ

ージャーの石又ですべてだ。

つまり、このバッグを手にした人物もこうなることを知っていた……。

「そんな、あいつが内通者……」

「だめですよオお姉さま、気弱な一般人に怖い思いさせてはつかじゃ」

陰は優雅に腰を振りながら自信たつぷりに歩み寄ってくる。

「くっ、好きになれないやつだと思つてたけど、まさかここまで……」

「憂さが溜まつてたんでしようね。悪い女に手を出しちゃつてだァいピンチ。お堅い巫女さんじゃ助けてくれるか怪しいもんだし、アタシたちが助けてあげちゃつたわけ」

その見返りがこれなのだろう。あの男の身辺調査をもつと密にすべきだったと後悔するも、今となつては後の祭りだった。

いくら優秀な退魔巫女でも、専用武器なしで彼らと戦うことなどできない。ここは逃げの一手しかないと踵を返して駆け出そうとするが、水着姿の巨乳巫女はすぐさま取り押さえられてしまつていた。

「くっ、放してっ、この、汚い手で触らないでっ！」

「へへへ、退魔巫女つてのも大したことないなあ、素手じゃなあんにもできないかあ？」

「あァら残念。お姉さま、もうちよつと抵抗してくれるかと思つたんですけど。それともオ、犯して欲しくてもう我慢できないとかァ？」

「なっ!? そ、そんなわけないでしょうっ!」

半眼で笑う陰に向かって瑠璃亜は声を荒らげる。だが強気なその表情は、男たちに担ぎ上げられすぐに困惑の色に染まった。

「やあつ、な、なに、放してっ——ひやああつ!?!」

男二人が左右から持ち上げ膝裏に手を入れぐつと開く。両手は別の男に掴まれ後ろ手にロープで縛られる。

その姿はまるで、幼児が親に放尿を促されるような格好だった。

「クスクス、いい格好ねお姉さま。いやらしいところがよく見えてる」

目の前に来ると、陰は陰部を覗き込んで鼻をスンスンとヒクつかせる。

「アハハ、もうおツユが漏れちゃってますよね? こおんなにいやらしいにおいさせて、エッチなお姉さま」

「や、やめて、においなんてっ……ああいや、そんなにいっぱい嗅ぐなんてえ……」

「だってとっても芳しいんですもの。ほら見て、エッチな水着がぬるぬるしてるウ」

彼女の言うとおりだった。イキかけるほど刺激されて、瑠璃亜の陰部は淫らなぬめりでいっぱいだった。

しかも透けるほど薄い生地は、媚肉にべったりと張り付いて花卉の形まで浮き彫りにしている。こもりと膨らむ肉土手の中心にうっすらと浮かんだその溝は、初々しさを感じ

させつつもヒクヒクと切なげに息づいていた。

「いや、こんなの……放して、この、このっ！」

間近で見られる屈辱と羞恥に瑠璃亜は足をバタつかせる。が、陰の赤い舌が内股をネロリと舐め上げてくると、再び走る甘い微電に腰がぶるるっ、と震えてしまう。

「はあっ、ああいやあ、こんな、こんなのっ……！」

「気持ちいいですかア？　そうですねエ、陰特製、媚薬入り日焼け止めをしっかりと塗ってあげたんですから」

（くっ！　そういうことだったの……道理で敏感すぎると思った……！）

仕組まれていたことが改めて分かり瑠璃亜はまた歯噛みした。最初からおかしな現場だったのだ、もつと警戒すべきだった。自分自身、デビュー初期は苦労があったためつい甘い顔をしてしまったのだ。

ともあれ今は何とか脱出しなければ。そうは思うのだが、媚薬の効果はすでに少女から自制心を奪いつつあった。

「はあっ、あはっ、や、やめ……はああつ？　そ、そこ、そこはあつ！」

「やん、お姉さまのココ、エッチなおツユが垂れてきてるウ」

内股をゆったりと愛撫しながら腿の付け根を陰は舐める。入念に刺激を受けたそこは、すでにわずかなタッチでさえ鋭敏に反応するようになっていた。

その上陰は、あえて花卉を避けるようにその周りばかり責めてくる。

「はあっ、んああっ、す、吸っちゃだめ、アソコの近く、そんなに吸い付いて、はああっ！」
 (だめ、敏感になりすぎちゃってるっ。さつきイキそうでイカなかったから、アソコ、すぐに疼いちゃってえ……！)

一度は燃え上がった官能の炎が新たな火種を加えられる。あのととき絶頂を目指してしまつた若く瑞々しい適齢期の女体、その本能が降り注ぐキスにひとりでに歡喜し始めていた。もちろん瑠璃亜は必死にもがいて逃れようとする。だが、陰の唇の柔らかな肉感には敏感な肉土手には心地よい。垂れた恥蜜を啜りながら暖かな唾液をまぶされていくと、甘い痺れと自らの緊張に自由はますます封じられた。

「はあ、はあ、や、やめなさいっ、こんなこと……どういうつもり？ なんのためにこんな……」

意味が分からなかった。これまでとて退魔巫女が敗北した例もなくはなく、皆すべからく抹殺されている。今はそのチャンスだというのに、陰たちは何をしたいのだろうか。

「お姉さまだつてご存知でしょう？ アタシたち闇の眷属は欲望に忠実なの。そりゃそうですよね、欲望の闇が醸成して集まったのがアタシたちなんだから」

瑠璃亜の疑問に、陰は部下からカメラを受け取り答える。

「エッチなことだつてももちろん大好き。アタシは刈忌と違つて芸能界の支配なんて興味な

いです。でもオ、こおんないやらしい身体した巫女さんを、ただのグラドルにしておきたくはないんですよ」

そう言つて陰は膝をつき、瑠璃亜の顔が見える角度から大股開きの陰部にレンズを向けた。

「だから今日は、お姉さまのエッチなところをいっっぱい撮っちゃいますね」

「そんなつ？ あ、いやあ撮らないでえつ！」

際どい陰部にフラッシュを浴びて瑠璃亜は唇をわななかせた。

今の彼女は男に抱えられ、すっかり濡れた水着の股部を大開脚して前に突き出している格好だ。犯してくださいと言わんばかりの大胆に過ぎる絵面を想像し、彼女は激しく狼狽していた。

初めて怯えを見せた瑠璃亜、その表情を陰は満足げにレンズに収める。

「いやつ、やめてえつ！」

「アハ、お姉さまステキ。その怯えた表情、堪えないわア」

小刻みに焚かれるフラッシュを前に瑠璃亜はただ顔を背けることしかできない。宿敵どもにいいようにされてきている情けない自分が恥ずかしかつた。

だが何よりも、これまでにない破廉恥な撮影に羞恥心が刺激されて仕方ない。

(いっ、いやあ、恥ずかしいところ、撮られてる。わたしのアソコ、はみ出ちゃいそうな

アソコ……!)

ただでさえ細い股布は、乙女の入り口を隠すまさにギリギリの面積だ。大開脚した今の状態では、紐のようなものが一本縦に走っていると見えるはず。

そのほとんどあらゆる白い肉土手を、蜜を広げてヒクつくその肌を、誰のものが分かるように顔と共に撮影されていく。心に激しい荒波が立ち冷静な思考が奪われていく。

しかもそれだけではない。カメラ片手に陰は秘所に指を這わせてきたのだ。

「んあああつ！ 触らないで、だめつ、そこはあつ……!」

「なに言ってるんですかア、さつきもボートで散々オナニーしてたじゃないですか。クス、あのとのお姉さまの気持ちよさそうな顔。ちゃあんと撮影済みですからね」

「そ、そんなこと、あれはあなたが……ああんつ!」

——にちゅつ、にちゅつ、くちゅつ、くちゅつ……。

陰は柔らかい指腹を使い、水色の布地に浮き出た割れ目を巧みにしつこくなぞっていった。

「はああ、んあ、だめえ、いやらしい動きつ……はあつ！ やめ、てえ……!」

水着越しとはいえ性感帯の急所なのだ、女体はひとりでに快楽を拾って新たな蜜を溢れさせる。それだけでなくともこれまでの淫戯で水着はすっかり蜜にまみれ、押し付けられる指腹に吸い付きニチャニチャとはしたくない音を立てていた。

そして奥のなめらかな肉土手は、強い疼きを嘔み締めながら甘い電流に媚震えていく。

「クス、お姉さま腰が動いてる。顔もいやらしくなってきた」

「はぁ、はぁ、だ、誰がつ！ わたしそんな顔……！」

「うそ。もう目尻が蕩けてるくせに」

残念ながらそのとおりだった。一度は抵抗を見せたものの、その眼差しは再び目尻を下げ始めてしまっていた。

無論、塗られた媚薬が効いているのは間違いない。だが同時に、繰り返される眩しいフラッシュに言いようのない興奮を覚えてもいた。

（こ、ここまで破廉恥なの、初めてっ……今までだってそうだったけど、こんなに恥ずかしいと、頭、おかしくなるっ……）

元は着飾ることもなく巫女の使命一筋だった。そんな自分がカメラを向けられ悩ましい姿で脚光を浴びる。そのことに当初は戸惑っていたが、いつしか見られる羞恥の中にかすかな恍惚を見出すようになっていた。

そのためか、レンズを向けられるだけで、その向こうにいるファンの顔を想像してしまう。頬を赤らめ見入る者。綺麗だと称える声。脱いだ姿を妄想しているに違いない眼差し。初めは嫌悪しかなかったそれらを、いつの間にか快く思う自分がいた。

なぜならそれは——女としての美しさの証拠だから。欲しがられる証だから。彼女にと

つては、グラドルになった瞬間こそが人生で初めて牡の視線を意識した瞬間でもあったのだ。

女は見られてこそ美しく輝くというが、瑠璃亜もまた例外ではなかった。

「はあ、はあ、はあ……んあ……」

この写真が大勢のファンに見られる。艶めかしくも股を濡らし喘ぐ姿を注目される。そう思うと、それだけで背筋がゾクゾクしてきて恐怖と恍惚の区別がつかなくなる。

「お姉さまったら、こおんなに簡単に感じてしまうなんて。やっぱりそう。堅物つてのは大抵、ちやほやされるとすぐ浮かれちゃうんですよねエ」

瑠璃亜の深層を見抜いた陰は、闇の眷属らしい陰湿な笑みを浮かべた。

そして秘所から手を離すと、今度は狙いを豊満な乳房へと変える。

「だめですよお姉さま。簡単にイっちゃ面白くないじゃないですか。こつちもちやあんと楽ませてくださいよ」

「な、なにを、あつ、ああつ！」

陰の五指が乳肉を持ち上げぐいつ、と強く揉みしだいた。驚きとも嬌声ともつかない声を瑠璃亜は意識せずあげてしまう。

そのままグニグニと揉み込みながらその手がチューブトップを掴む。

「クス、浮き出てる勃起乳首、さつきより立ってますよ？ いやらしいお姉さま。さア、

「いよいよお披露目タイムですよ」

「あつ、いや——だめえっ！」

陰の両手が布地を掴んで一気に左右に引き裂いた。柔肉が一度中央に寄ってから横に大きく揺れてまろび出る。

——ぷるるんっ！ たぶんっ！

「わアお！ これがお姉さまのおっぱい……すつごおい、陰の頭くらいあるウ」

「なんてえ乳だ、堪んねえ！ デカイ割りに形もいいぜ！」

豪快に揺れ動く巨峰を目にして陰も男らも歓声をあげた。

あらわになった瑠璃亜の乳房は、本当に美しいものだった。Gカップもの大きさながら修行で鍛えた胸筋に支えられ、わずかたりとも垂れることなくむしろ上を向いていた。

その表面には張りもあつていかにも弾力がありそうである。しかし同時に、わずかな動作で波打つ様子が実に柔らかさうでもあつた。

「ステキなおっぱい。見てるだけでどきどきしちゃう」

白く輝き、その先端は淡いピンク。乳首も小さなその果実に、陰はカメラをズイッと寄せる。

「ああそんな、あ、アップなんてえ……！」

「ああん動いちゃだめですウ、今回のテーマはずばり『瑠璃亜のエロイトコ全部見せます』だもん。ほオラ、普段見えない可愛い乳首もしっかり撮らないと」

そう言つて陰は、触れるほどの超近距離で桃色突起を撮影していく。

——パツ！ パシヤパシヤパシヤッ！

「は、ああああつ……！ だめ、そんなの、だめえ……！」

角度を変え距離を変え、薄い乳輪を舐め回すようなカメラの動きと絶え間ないフラッシュ。そこから生み出される強い羞恥が、乙女の純心をさらにグラつかせ細い眉根を歪ませていく。

「い、いやあ、乳首、いっぱい撮るなん、てえ……！」

「そんなこと言つて。ビンビンの乳首、ますます尖つてきてますよオ？」

陰の言葉がより先端を意識させる。見られるだけなのに感度が上がり、突起がより硬くしこつていくのを止められない。

さらにカメラが突起にむにゅつと押し付けられると、ひんやりとしたレンズの感触に瑠璃亜は高い嬌声をあげた。

「はあうんっ！ あはあ、さ、刺さつちゃうう……！」

「アハ、お姉さまのおっぱい柔らかかアい、むにゅむにゅ動いてレンズに吸い付くウ」

「だっ、だめえ、捏ねちゃ、捏ね回しちゃ、んあああつ！」

レンズに突起を張り付かせたままカメラは不規則な円を描く。その動きはまさに、乳首を転がす愛撫そのものだった。

だが実際、焼けるほど熱した乳神経にレンズの冷たさは心地よい。特に突起は柔転がされてじんじんと快く痺れていった。

「はあつ、ああつ、いや、いやあ……！」

（は、恥ずかしいつ。生で撮られて、いっぱい見られて、なのに、なのに、ああ……！）
悔しいが、声が高くなり湿り気を帯びていくのが止まらない。羞恥心が強まるたびに快楽神経が蕩けていくのが止められない。

「へへ、陰様、こいつ本気で感じてきましたぜ。こんなに汗かいて肌も色付いてきてますよ」
「いやらしい顔しやがって。おら動くなつて、気持ちよさそうに腰くねらせてんじゃねえよ」

男たちの言うように、今の瑠璃亜は見るからに官能に酔い始めていた。乳房が卑猥に歪むたびに締まったくびれが悩ましく振れ、林檎色に染まった頬からは汗珠がツツウ、と滑り落ちる。開いた両足は力が抜けて、恥蜜に濡れた白い臀部がビクッ、ビクッ、と震えていた。

それを見ていて待てなくなつたのか、男たちもついにその手を乳房に伸ばした。カメラの刺さつた乳肉を掴みゴツゴツした指でグイグイと揉む。無遠慮で荒っぽいその愛撫に、

しかし瑠璃亜は官能を見出しはしたない鼻声を漏らしてしまった。

「んあああつ！ はあつ、はあつ、あふつ、いやあ、強い、乱暴なおつ……！」

「あれエ、お姉さまって荒っぽいのが好みなんですかア？ クス、嬉しいなア、アタシもそういうのが好きなんです。ほら、こおんな風に」

——きゅつ、ぐいつ！

「はうううつ!? くあつ、ち、乳首いい……！」

カメラを放すと、陰は指先で突起を摘み捻るようにしてみせる。途端に瑠璃亜は背筋を反らし、大口を開いてガクガク震えた。

（だめつ、こんなことされてたら……力、抜けきつちゃう。本気で抵抗できなく……）

ことここに至っても瑠璃亜は脱出の機を窺っていた。いくら闇の眷属とはいえ人一人抱え続けていれば、いずれは疲れて降ろそうとするだろう。その瞬間に急所——金的でも狙えないかと考えていた。

しかし媚薬の沁み込んだ若い神経は、本人の意思を置き去りにするように痛みにすら愉悅を見出ししていく。

「痛つ、くうつ……くあ、乳首つ、引つ張らないでえ……つ」

「アハ、いやらしいおっぱい、こんなにされてるのに乳首硬くしてだらしく伸びちやつてるウ」

両の乳首が上に引つ張られ楕円形に伸ばされる。その姿はまるで、吊り下げられた白いレモンのようだった。

もつともそのレモンは、サイズにおいてはメロンほどもありぷるぷると柔らかく揺らめいている。少女が再び先端を捻ると、白い果実は歓喜したように艶めかしくも波紋を刻んだ。

「はああだめえ！ 胸が、おっ、おっぱいがあつ！」

「おっぱいが、なアに？ イっちゃいそうなの？」

「ち、ちがつ、そんなんじゃ、わ、わたしい……！」

口では必死に否定しつつも、鋭い媚電が乳腺に走って乳房の熱感が最高潮になる。熱くて、蕩けて、媚電が胎内にガンガン響いて、抵抗の意思が溶けていくように脳裏に甘い霧が広がる。

自分一人では知ることのなかった痛くて甘美な乳房の悦び。それを肉体が受け入れつつあり、瑠璃亜はただただ困惑した。

それを見て取った陰が、ツインテールの金髪を揺らめかせ乳首を乳輪ごと口に含む。

「はああだめえ、今されたら、す、吸われたらあ……！」

暖かくぬめぬめ唇の感触に瑠璃亜はますます声色を湿らせた。喉元を震わせ予感に腰をヒクつかせる。

そして、強く吸い込まれ伸びた突起がカリッと前歯で噛まれた途端、

「んあああだめえええっつ！」

——びくんびくんびくんっ！

瑠璃亜はくびれを大きく振って甲高い嬌声をあげてしまっていた。同時に陰部が痙攣して、元から濡れていた細い股布に滴るほどの湿り気を与える。

男を知らぬ処女巫女が、初めて胸で絶頂を味わった瞬間だった。

「っくくくはあっはあっはあっはあっ！ こ、こんな、わたしい……っ！」

「はははは！ 見てください陰様、この女イキましたぜ」

「でっかい喘ぎ声出しやがって。誰か聞いてたらどうすんだあ？」

「いいじゃねえか、どうせ写真が出回るんだからよ」

闇の眷属らが口々に嘲弄を浴びせてくるも、今の瑠璃亜には反応している余裕がない。胸の熱が一気に弾けて全身の感覚が溶けてしまいそうだった。

（な、なんなの、この感じっ……こんなの初めて。胸だけでいったことなんてないのに……）

どちらかと言えばこの巨乳はコンプレックスだった。グラビアモデルを始める前は異性の視線が鬱陶しくすら思えたものである。そのせいも、自慰のときでも乳房を弄ることは少なかった。

しかも硬い歯で噛まれて痛いのに絶頂へ至るなんて——自分自身が信じられない心地だ

った。

「クスクス。お姉さま、とってもステキなイキ顔ですよ？　アタシも本気でサカっちゃうくらい」

今の瑠璃亜には、どこか優しい陰の声すらありがたく思えてしまっていた。

(た、助けて……このままじゃわたし、おかしくなっちゃう……)

機を窺っていた巫女の心に初めて弱気の影が差し込む。決してするまいと考えていたが、膝を折ってでも許しを請いたくなってきた。

そんな気配を、陰は鋭敏に悟ってみせる。

「お姉さま、その顔とってもステキ」

またも顔をカメラで撮られて瑠璃亜はあつ、と声を漏らす。か弱く大人しいその反応に陰は満足したように笑う。

「でもオ、まだこれからですよ？　次はココも撮らないと——ねっ！」

「え——あつ、だめえそれはああつ！」

慌てたがもう遅かった。最後に残ったローライズの水着、際どいボトムが握り締められ強く手前に引つ張られていた。

無論水着は破られまいと抵抗をする。が、紐のようなそれはあまりに脆く、一瞬尻肉にグイッと食い込み次いで儂くも引き裂かれた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>